

第 6 回 西アジア分科会 議事録

開催日時: 2007 年 10 月 12 日 15:30~17:00

場 所: 東京国立博物館 平成館 第 2 会議室 (3F)

出席者(敬称略) : 前田、上岡、八尾師(分科会委員)、高濱、林、渡辺(東アジア・中央アジア分科会委員)、深掘(招待)、浅野、勝平、樋口、石田(文化庁)、齊藤、守山(外務省)、山内、谷口(陽)、有村、宇野、永井(東京文化財研究所)、清水、青木、田代、豊島、谷口(仁)(コンソーシアム事務局)

■ 本日の会議について [西アジア分科会会長 前田耕作]

・本日の西アジア分科会には、議題の関係で、東アジア・中央アジア分科会のみなさんのうち、中央アジアに深く携わっている先生方にも特別参加いただいた。

■ タジキスタン出張報告 アジナ・テパ遺跡保存修復事業について [埼玉大学 渡辺邦夫]

報告の概要

- アジナ・テパ遺跡の概要と、これまでの発掘の歴史、出土品等についての紹介。
- 2005 年より開始されたユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院保存事業」発足の経緯と、これまでの活動報告。プロジェクトのマスタープランは、①保存修復、②学術研究、③ドキュメンテーション、④限定的な考古学調査 という点を目標としている。
- 2006 年は主に事前調査に充てられ、今年度より本格的な保存修復事業が開始されている。2006 年度は、遺跡の地図や 3 次元図の作成を実施。2007 年度は、引き続き 3 次元図のための測定の実施や、壁面崩壊の把握、環境測定などを実施すると共に、崩壊防止のための緊急修復を実施した。今年 8 月頃からはタジク側の姿勢にも変化があり、副大臣の視察や、熟練技術者の任命など、体制が整いつつある。
- 緊急修復措置については様々な方法を検討したが、まだ技術が確立していない点も多い。早急に崩壊と侵食を留めねばならず、ややオーバーデザインと思われる方法を採用した。11 月ごろより始まる雨期の前には、とくに崩壊の危険のある場所に修復措置を施す予定である。
- ストゥーパについては、覆い屋をかけることも検討したが、現在は練り土で覆う方法について検討中である。なお、また、マスタープラン策定に向けて、排水のことやストゥーパ上に設ける階段の設置、観光ルートをどのようにするか、など、マスタープランに取り入れるべき課題が多く残っている。とくに遺跡全体のデザインについて、埼玉大学深堀准教授が景観的な視点を中心に現地を検討する予定である。
- 2008 年は、技術移転ということで、測量技術や 3 次元映像作成のためのソフトの使用方法などタジキスタン工科大学の学生に移転することを考えている。この遺跡の最終的な遺跡管理の責任をどの組織が負うことになるのかは現時点で不明であるが、文化省の技術者等にも移転を行っていきたいと考えている。

1989 年および 1991 年時点でのアジナ・テパ遺跡の状況について(スライド紹介) [創価大学 林俊雄]

報告の概要

- 参考までに、1989 年ドシャンベ考古学研究所、1991 年アジナ・テパ遺跡出張時の映像を紹介する。
- ドシャンベ考古学研究所に保管されていた出土涅槃像も当時は復元されていなかった。
- また、参考までにイランの西北部(ハサンルー等)での日干しレンガの壁面の修復例を紹介する。きれいに修復されているようであるが、この方法だと、はがれてきてしまうので、最低でも毎年 1 年に一度は表面塗りの作業が必要になるとのことだった。

- ・土構造の遺跡保存は非常に難しいことがよくわかった。
- ・アジナ・テパでは、大きく壁を覆ってしまうので、本来の状況がわかりにくくなってしまっているのではないか。(毎年の維持管理が必要となる修復がいいのか、1回で大がかりな措置を施して数年もたせるのか)どの保存措置が本体にとっていいのかは、よく調べてみないとわからないだろう。
- ・エジプトのある現場でも、表面塗りの保存修復を行っており、3年に一度は維持管理作業が発生するとのことであった。
- ・観光ルートについて、先ほど紹介した案ではメインルートはストウーパの左側からを抜けていくような状況であったが、右を回って、もとの宗教儀礼(右繞)に沿った形でのルート設定はできないのか。
→ そのようなご意見も取り入れて検討していきたい。
- ・アジナ・テパは涅槃像が出土している遺跡と言うことで、アジアの中でもとくに日本が注目をしてきた遺跡である。保存修復プロジェクトも残すところ後1年だが、土構造の遺産保全修復の一つのモデルになるよう、来年1年大きな成果を目指していただきたい。

■ タジキスタン出張報告 タジキスタン歴史古物博物館 壁画資料の現状調査報告 [東京文化財研究所 山内和也・谷口陽子]

報告の概要

- タジキスタン古物博物館(タジキスタン国立博物館)の壁画収蔵品の現状調査を実施してきた。タジキスタンは1993年にソビエト連邦から独立した際にできた博物館であるが、展示されている壁画はごくわずかに過ぎず、大多数の壁画が、環境の整わない倉庫に山積みになっている。
- ソビエト時代には、エルミタージュ美術館のスタッフがこの地で考古学活動をしており、とくにペシセントでは多くの作品が保存及び軽量化の目的で極薄ではぎ取られているため、壁画として本来持っている価値が損なわれてしまっている。ソビエト時代にはエルミタージュ美術館に移送して保存修復を行っていたが、旧体制崩壊後はこれらの作品がタジクに残されるようになり、それと同時に修復も行われなくなってしまった。エルミタージュ美術館の修復技術者は、壁画の強化処理のためにPBMA-NV樹脂を使用していることから強い光沢や変色などを引き起こしている。
- 現地では、保存修復のための薬品類を扱えるようなラボが存在せず、また現地専門家についても技術的、化学的知識が不足しており、最新の知識を入手するような状況には至っていない。

- ・タジキスタンに限らず、中央アジアの博物館の多くは、展示環境や空調以前に収蔵庫の棚というレベルから支援しなければいけないのが現状だ。タジキスタンに関しても、収蔵設備を草の根文化無償で手当てしてもらえないか、大使館に働きかけを行っているところである。
- ・先日タジキスタンを訪れたとき、博物館の中が閑散としている、というイメージを持った。ラフマノフ大統領の政策からはタジキスタンのナショナリズムを随所に感じるが、こうした流れの中で、エルミタージュに保管されているタジキスタンの美術作品の返還運動などが行われたりはしないのか。
→ エルミタージュに保管されている旧ソビエト連邦から独立した各国の美術品のうち、タジキスタン出土のものに限っては、タジキスタンが所有権を明確に保持している。したがって、彼らとしてはいつでも返還要求は出せそうであるが、実際の所タジキスタンは観光客が少ないので、それであれば観光客の多いエルミタージュで多くの方々に見ていただいた方がいいのではないかと考えている。その他の中央アジア各国の美術品についてはロシアが所有権

を持っているとのこと。各国で事情が異なるということのようだ。例えば、キルギスタンの涅槃仏に関しては、ロシアが返還に応じたそうであるが、巨大な涅槃仏の運搬や展示に問題があり、未だ実現に至っていないという情報を聞いている。

■ バーミヤーン遺跡保存事業 第8次ミッションの成果報告 [東京文化財研究所 山内和也]

報告の概要

- 第8次ミッションでは、これまで行われてきたI窟、N(a)窟での壁画保存修復作業を継続すると共に、保護すべき遺跡の範囲を確定するための考古学的調査や、カクラク川上流域の遺跡分布調査等を行った。
- また、東京文化財研究所との共同研究として「バーミヤーン遺跡出土陶器の研究(金沢大学)」、「バーミヤーン石窟以降の現状記録調査のための研究(株式会社パスコ)」、「バーミヤーン遺跡保存のための崖崩壊予測及び地下探査に関する研究(応用地質株式会社)」を並行して行った。
- 遺跡分布調査(カクラク谷)では、望楼(ボルジェ・カーフェリー)などが発見された。
- これまでバーミヤーンでは仏教遺跡ばかりが注目されてきたが、現在のイスラーム教徒住民にとっては彼らのルーツを知ることとなるイスラーム時代の陶器に関する研究は非常に意義のあることである。この研究によって、史実によって語られてきた、チングス・ハーンの軍隊によるバーミヤーンの住民の大虐殺が考古学的にも裏付けられる可能性が高い。

・遺跡分布調査で発見されたカーフェリーは、イスラーム以前のものか？ 現地の住民は、どのような感覚で、どのようなものをさしてこの言葉を用いているのか。

→ 少しでも古いものについては、すべて「カーフェリー」と表現しているようだ。ただ、このあたりはゾロアスター教、という概念がないので、イスラーム以前の異教徒のもの、という認識で話しているようだ。

■ アジャンター出張報告 [東京文化財研究所 山内和也・谷口陽子]

報告の概要

- アジャンターの壁画保存修復事業に関する調査を行った。文化庁が行っている文化遺産国際協力交流拠点交流事業の枠組みにおいて、日本とインドの間の合意に基づいて、インドのアジャンター遺跡をフィールドとして、壁画の修復に関する人材育成を行うと共に、技術や研究に関する情報交換を行うことを目的としている。日本としては、敦煌その他の地域で培ってきた技術をこれらの地域に生かしていきたいと考えている。
- これまでバーミヤーンの壁画について調査研究を続けてきた結果、これらが、ソグドや中国西域の壁画とは材質や技法や大きく異なると考えている。したがって、バーミヤーンでの壁画を更に理解し、位置づけるためには南アジアでの壁画に関する調査研究が不可欠だと考えており、アジャンターでの壁画の研究が重要だと考えている。
- アジャンター遺跡は 18 世紀以降に発見され、その後イタリア隊が壁画を見やすくするために「シエラック」と呼ばれる樹脂を塗布しているが、これが経年劣化により暗色化し、壁画が見えなくなってしまう、真っ黒になってしまっていた。これを、インド考古局の修復専門家が取り除くための洗浄を行っているが、この薬品にも色々な問題点があり、また、コウモリ等による生物被害もあり、課題を多く抱えているというのが現状である。ここに、我々日本隊が、バーミヤーンや敦煌で培った技術でいくらかでも貢献できないか、と考えている。
- 今年度は予備調査を行い、2008 年度から 2011 年度にかけての 3 カ年計画を予定している。
- この事業についてはインドとの拠点交流事業であるが、そもそもはより大きな枠組みという側面を持っており、日本とイタリアの協力、という事業に組み込まれている。日本とイタリアは、文化遺産の保存に関して第 3 国での協力を行っていくことで合意をしており、そのフィールドとしてアジャンターを検討している。イタリアは既に第 17 窟で活動をしているが、我々は 2 窟および 9 窟を中心に活動を行おうと考えている。同じ

アジャンターというフィールドを持つことによって、直接事業を共同で行うインドだけでなくイタリアとも情報交換を行っていくことにより、日伊の文化交流事業と位置づけることができる。

- ・このプロジェクトは、日本とイタリアの、第 3 国における文化協力に関する合意に基づくプロジェクトでもある。イタリアは全世界 140 箇所に修復の専門家を派遣しているし、文化遺産保存修復の国際協力がさかんな国である。他方我が国もアジアの中では一番の文化遺産に関する国際協力を行っている国であり、いわゆるヨーロッパ、アジアの国際協力先進国が協力し、一緒に国際貢献を行うことが一つの目標である。イタリアも多くの国で活動しているが、技術協力という点で全く課題がないわけではないので、日伊両者の連携の中で、文化財の特質に応じた文化遺産保護の手法などを形成していくことができるのではないかと考えている。

■ その他

- ・中央アジア及び中国によるシルクロードの世界遺産シリアル登録プロジェクトについて、10月29日、30日に中国西安で国際シンポジウムを開催するとの情報が入った。日本 ICOMOS 国内委員会前野まさる氏に招待状が届いているが、氏より、我々へ協力の要請があったため、前田耕作、山内和也の 2 名で当該シンポジウムに参加し、可能であればシルクロードにタイする日本の考えを説明するようなプレゼンテーションをする場を設けてもらいたいと考えている。
 - シルクロード世界遺産登録に関するシンポジウムについては、文化庁記念物課にも情報連携済みである。必要であれば、協力を要請することができる。
- ・東京文化財研究所では、毎年アジア文化遺産専門家国際会議を開催しているが、今年度は 3 月上旬頃にウズベキスタンのタシュケントで開催したいと考えている。詳細についてはこれから詰める予定である。
- ・次回は 2008 年 1 月下旬ないし 2 月ごろを予定。追って日程調整を実施する。

以上